

私は運転手でない



インドの田舎の喫茶店。客は甘い紅茶とお菓子で、いつまでも話は尽きない。

友人と二人でインドの仏跡巡りをしていた時のことである。

ラージギルはブツダが晩年を過ごしたマガダ国の王都で、ガヤはブツダ成道の地ブツダガヤから北へ十キロほどの小さな都市である。われわれはラージギルからガヤに帰るため、路線バスに乗った。そのバスが途中の村で突然止まった。

ここが終点だと告げられ全員が下りはじめる。友人と私は、おおいに困ったが、そしてそこがどこなのかさっぱり分からなかったけれど、ともかく下りるしかなかった。

ガヤまでの車を探さなければならない。まだ日は高くそれほど心配するほどのことではない。

すぐ客引きがあらわれた。

「ガヤまでジープが行く。おまえら乗らないか」

「いくら?」

「安い」

「どのジープか?」

彼は幌のついた小型のジープを指差した。後部の幌をあげて入ろうとして驚いた。も

う立錐の余地もないほどの人である。車の中で出発を我慢強く待っていた現地の人たちが、また来たかという目でいっせいにわれわれを見た。あの鋭いインド人のまなざしがわれわれ二人を射抜く。しかし、乗るしかない。私と友人はそこになんとかもぐり込んだ。

ぎゅうぎゅう詰めの中、客の一人が私に前の席に行けと言うので、私はいったん外に出て前にまわって中をのぞき込んだ。

運転席に一人、その他四人、それだけの人がそこにいた。そこにわり込めと言われたのでそうするしかない。なんとか身体を押し込んだ。

私は、運転席に座わり疲れた様子でハンドルに手を掛けている人に尋ねた。

「いつこのジープは出発するのか？」

「わからない」

「わからない？」

「私は運転手でない」

しばらくして、先ほどの客引きがやってきて、運転席側のタラップに足をかけた。彼

がドライバーであった。身体の半分以上を外に出し、わずかにねじり込んだ足となんとかハンドルをつかんだ左手だけで、彼は車を発進させた。

彼はそんな姿勢で運転を続けていく。けっこうなスピードである。道路は車ひと幅分しか舗装してないが、対向車とすれちがうときにみせる、ドライバー氏の身のこなしは見事というしかない。彼は、車外に出した身体をそのままに、速度を落さずに対向車に向っていき、すれちがう直前、体操の選手が鉄棒に上がるときにするあの腕力で我が身を車の中に入れるのである。

そんなことを繰り返しながら、しかし、客は途中の村で少しずつ下りていき、ガヤに着くころにはかのドライバー氏はハンドルの正面に座って少しもの足りなさそうにジープを走らせていた。

経済発展著しいインドだが、いまでも同じようなことがあの広大なインドのどこかで行われているにちがいないと思う。

(二〇〇七年六月二〇日)